

## 第七編 結論

真理に忠実なれ

昭和八年三月十日、日本宗教界唯一の権威たる「中外日報」の社説は次の如く論じた。

真理の支持者

宗教徒は何時の時代にも卒直に真理に仕えるものであるべく期待されてある。少くともその信奉する宗教的真理を思案に宣揚すべく渾身の努力をささげなくてはならぬ。これは宗教徒の唯一の使命であり唯一の権威である。宗教徒はにの一事を日夜に銘心しなくてはならぬ。敢て宗教徒という、必ずしも宗教家として世に立つもののみでなく、宗教信徒として生活するものを包括するのである。かつその宗派約分類はいかようにあるうともこれらの一切を統合してよびかけるのである。この宗教徒はこの人世において不断にかつ最後まで、正しい真理の尺度として厳存することを希望して止まないものである。

しかもこの真理を支持することは何時の時代においても最大の難事である。この地上には敢て真理をけ散らかして発展される生活がかなりたくさんあるからである。そしてかかるときこそ真理の宣明が一層必要なのである。これがためには宗教徒そのものの結束が何よりも必要である。宗派的判断はいかようにあるうとも真理の支持者たるに相違すべきでないことはもちろんである。宗派的利害による結合よりも、この宗教的使命による偉大な結束は重大であり、切要である。これらの組織と結束をなすことを宗教徒は企てなくてはならない。現代においてなくてはならないもので未だこれなきものゝ一つは正にこれである。

宗教徒はこの結束により、活ける社会の形勢をとおして真理の光を放たなくてはならぬ、人生社会を厳かに指導し批判しなくてはならぬ。これには不断に一貫せる統制と主張を明白にしておいて、時代々々の動きに迫って行くべきである。宗教徒が時代の動きによつてその標示の旗色の変る如きことあつては、自ら自己を踏みつけるのみならず社会からの信認を失うことになること必然である。

以上を再読三読する時、まことに我らの遵守してゆくべき大精神そのまゝを表現された大文字であることを感ずる。私は今や「我らの使命」の終結にあたって、この記事を消化してゆく。

真理に忠実なれ

中外日報の論説は「その信奉する宗教的真理を忠実に宣揚すべく渾身の努力をさげよ」と告げる。まことに真理に忠実であるべきことを求められる点において宗教に勝るものはない。

人世には、寝そべって聞いてもわかる真理がある。

頭だけあればつかめる真理がある。

耳だけあれば知ることの出来る真理がある。

合掌して求めねば与えられない真理がある。

宗教的真理がそれである。合掌こそは、尊厳にして全人的な真理に向かう必然的な態度である。されば宗教は、このことがすでに如何に真理に対して忠実であらねばならぬかを示すものである。かくしてささやかれたる真理は「忠実に宣揚」すべきである。その全身全霊を捧げての努力こそ、「宗教徒の唯一の使命であり、唯一の権威である。」真理に対して忠実なる態度をとり、その社会的宣揚において全我的な精進努力を捧げること、即ち「宗教徒はこの人世において不断に且つ最後まで正しい真理の尺度として厳存する」ことこそ、真実なる宗教そのものである。

けだし真理の命ずるまゝに宣説し、実践し、生活せんとする熱がなくなつた時、宗教は人生におけるその与えられたる使命を捨てたのである。我らはここに厳肅なる批判を我らの上に下さなくてはならない。

「真理に忠実」なる態度において二つの方向がある。一つは真理自体の究明において、人間の独断を混入したり、あるいはその真理を人間の勝手によつて曲げてはならないことである。正法は断じて人間の勝手によつて造られたものではない。我らは忠実に伝統を尊重しつつ更にその深い真意を我らの上に発展せしめなくてはならない。真に領解するとは、単に記憶したり、文字や型を列べることではない。

かく真理自体に忠実であらねばならぬと共に、その真理を忠実に我らの生活の中に実践化しなくてはならない。

この二つは決して本質的に相違したものである。しかし実践の世界においては真理を無視しつつ、その觀念界には、真理に忠実ならんとするが如き態度が、無自覚のうちに習慣となつて平氣でくり返される。

あえて言う。聖達磨の法燈をつぐべき禅門において、管長の椅子を獲得するために醜い競争があるが如き、あるいは、宗派根性に囚われて、真宗のある派の寺院にして真宗他派の上人を招聘したとて処罰されたるが如き、彼岸においては、真宗十派はもちろん、一切衆生は皆、あらゆる隔てを超えて平等一味の聖聚たるべきであるのに、兄弟であるべきであるのに、真理に仕えずして、宗団の規に忠実ならんとするがために、かえつて宗教によつて人世に醜悪なる憎悪や隔てを造る。

されば我らは断じて最高真理以外に仕えてはならない。如来に忠実なることによつて教団を生かせ。教団を生かさんとして真理を無視し、本尊を弄ぶことは、宗教自体の自殺である。人間は、幾百年の歴史を持つ時、何時しかに造つた因襲や垢を宗教とまちがえる。しかしてその因襲や垢をすて、再び祖師に復り、真理に忠実ならんとする者の現われる時、必ず、彼は異端者の名を冠らしめられ、悲惨なる迫害の中におかれるであろう。

しかしその有する真理が永遠のものであり、人生になくなくてはならぬものである限り、真理は必ず、血を見るときも、勝ちつづけてゆくであろう。この真理が持つ必然の力に乗托して、仮令、如何なる苦難の中に立とうとも「不断に且つ最後まで正しい真

理の尺度として厳存すること」より外に宗教徒の真の使命も、意義も、喜悅もあり得ない。

光明団はただこの使命成就のために生れたのだ。我らはローマ法王の眷族となつて権勢を誇るより、マルチンルーテルとなつて滅ぶべきである。

### 血盟結束

我らは至る所で、寺院の若き僧侶の苦悶を聞く。僧侶であるより先きに人間であり、魂の声を殺すにはあまりに若人であり、因襲や、檀家門徒の無智やによつて造られた鉄鎖の前に降伏するにはあまりに良心の声が聞えすぎ、日進月歩の社会の相と、老朽者の説教との間にはあまりに隔りがある。しかも寺院の子弟と生れ、寺を継がなくてはならぬという宿命がある。こうした間にはさまつて、苦悶を続ける青年僧のあまりにも多いのを知っている。

もしその煩悶が仏教そのものに対する真理性を疑うことによつて生れているならば、それは無学のいたす所である。しかし、もし因襲と良心との葛藤から来るのであれば、結論ははつきりしている。

曰く、恐るることなく、立ち上つて、憎悪にあらず、ただ真理の無上命法によつて、正しい信念のまゝに大衆に働きかけよ。

破邪必ずしも顕正にあらず、顕正には必ず破邪を具す。正しさをおし進めてゆけ、必ずそこには正しさに組する同志が生れる。正しき真理の尺度として生きることより外に、どこに人間として生れた本質的な喜びがある。

だがそれは弱者には出来ないことである。

真理に対する眼を持たず、宗教的理性の麻痺せる者には出来ないことである。「しかもこの真理を支持することは何時の時代においても最大の難事である。」と中外日報はいう、然り、難事である。至難事である。だが誠に難事であるか。もし、真理の支持者にもなりたし、それと共に富を求め、地位を求め、名利を求め、安楽を求め、安価なる常識的な賞讃を求め、死せる平和を求め、更に命さへ投げ出すことが出来ないならば、真理の使徒たることは拒まれる。

ただ一切を捨てても悔いなき信念が生れた時、この至難事は易行道となる。

### 血盟

私は再び血盟を言う。一人の力は弱い。「報国の丹心独力を欺き、回天の事業空拳を奈何せん。」とは児島高德一人の心事ではない。やがて天下志士集る時、回天の事業は成就される。ここにおいて必ず成就さるべきは、異体同心の志士の血盟結束である。死生を共にし、困苦を分かち、同↓使命にむかつて獅子奮進する大同團結である。中外日報は「宗教的使命による偉大なる結束は重大であり切要である。これらの組織と結束をなすことを宗教徒は企てなくてはならない。」という。

だがその結束は「宗派的利害による結合」であつてはならない。又そこからは、1+1+・・・+1という真実の結束は生れはしない。ただ、大信の聖火によつて一なる時にのみ、期せずして偉大なる血盟結束は成就する。

しかしてその結束とは、決して他に依頼して、我が負担を軽くするためではない。一切を自ら背負って立つ者の結束である。

ああ、同胞よ、来たつて我らの血盟隊に加われよ。すでに我らの結束は成る。しかして、我らはこの血盟を重心点となし、厳粛に我らの使命をおし進める。険しき山坂あればこれを超えよ。

刃も剣もこれを受けよ。

攻撃、迫害等々は、却つて我らを莊嚴する天華ではないか。

時代は正に反宗教の時代であり、同時に正法権威を失い、邪教迷信滔々として世界を風靡する時である。それ故に我らの生くべき道ははつきりする。人間は果して反宗教的であるか。我らは社会大衆の盲目的流れに妥協しない。信ずるが故に千万人といえども我はゆくのである。

人間は真理を求める。

宗教は全人的態度において求められる真理である。

人間は宗教的存在である。

而して、多くの宗教は、非宗教的な、迷妄、虚偽、独断、阿片を混入する。

しかし宗教を揚棄するものは宗教である。宗教を清める者は宗教である。

而してその哲理において、その信仰において、最高峯にたつものは仏教である。

かく信ずるが故に、信ずるままに、我らの使命は遂行される。

増一阿含経に曰く

「立てよ。進めよ。仏の軍に加われよ。仏は軍象の竹林を砕破するが如く悪魔の軍を破滅したまふ。」と。

## 皇国

日本文化の国、自由の国、力の国、光の国、尊嚴なる歴史と、悠久なる国礎。上方世一系の聖帝を戴き、下万民忠孝一致の誠を致す。我ら又一致団結、皇国の発展に尽くさざるべからず。日本は大乗仏教相応の地、大乗仏教が掲げる高き文化の燈明は、過去深く日本精神を培つて来た。我らは更に、崇高なる仏教精神によつて厳正なる批判を、あらゆる社会の上に与えんと共に、明るき希望と高き理想とを示しつつ、国家を無限に完成して世界平和の源たらしめなければならない。国難恐るるに足らず、ただ社会人心の腐敗を畏れ、鬱勃たる精気の消失を怖る。腐敗するものは斃れ、無力なる者は亡ぶ。澁刺たる元氣と質実剛健なる民風と熾烈なる道義心とを養成して、皇国日本の使命を成就せなければならぬ。

あえてこの一文を草し、同胞に贈つて檄す。